

# 淋菌感染症の発生動向、2023年

国立健康危機管理研究機構

国立感染症研究所 応用疫学研究センター

同 感染症サーベイランス研究部

同 実地疫学専門家養成コース (FETP)

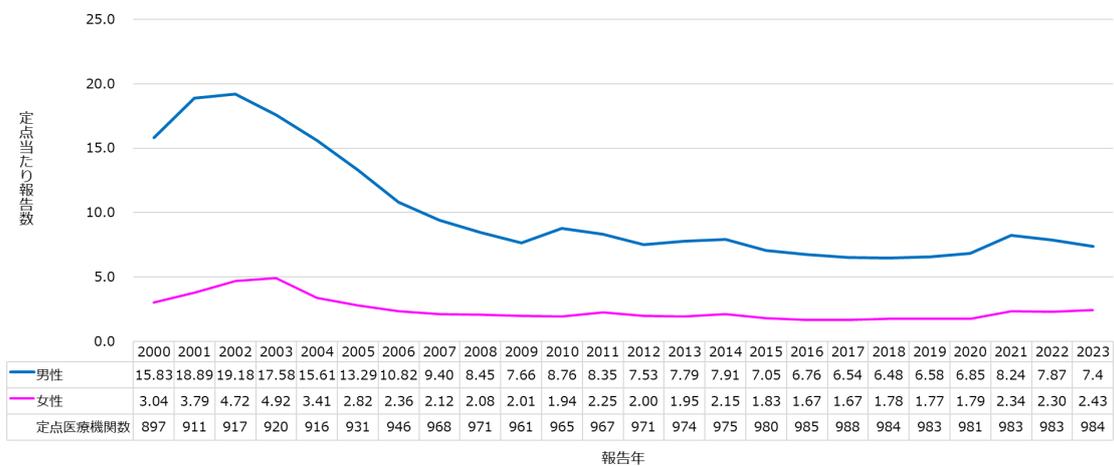
2024年10月26日現在

(掲載日：2026年3月13日)

淋菌感染症は *Neisseria gonorrhoeae* を起因菌とする感染症で、男性では尿道炎や女性では子宮頸管炎を主に起こす。淋菌感染症は、感染症法の5類定点把握対象疾患で、都道府県が指定した性感染症定点医療機関から感染症発生動向調査に報告されており、性感染症定点医療機関数は2007年以降1000弱でほぼ横ばいである。性感染症定点医療機関では医師が「症状や所見から淋菌感染症が疑われ、定められた検査方法により診断した」症例について、医療機関の管理者が月単位で届け出ている。定められた検査方法には、尿道及び性器から採取した材料、眼分泌物及び咽頭拭い液での *N. gonorrhoeae* の分離・同定、鏡検による検出、抗原の検出、遺伝子の検出が含まれる。

感染症発生動向調査における淋菌感染症の定点当たり報告数は、2002-2003年をピークに減少し、2016年以降はほぼ横ばいであった。2020年以降男女共に再び増加したが、男性は2022年に減少へ転じた(図1)。

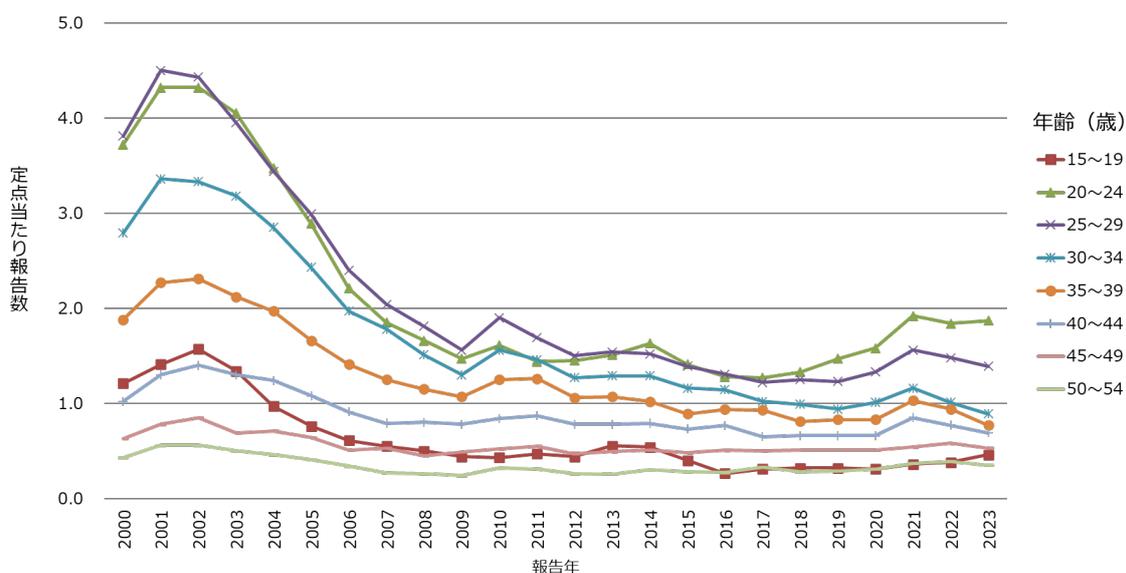
図1 感染症発生動向調査における淋菌感染症定点当たり報告数、2000~2023年



報告年

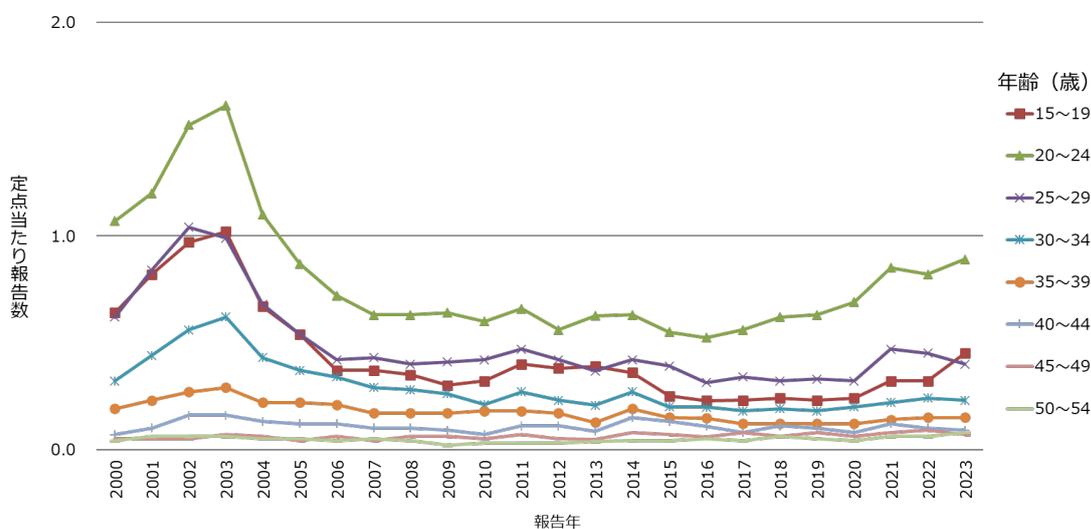
5歳毎の年齢階級別定点当たり報告数は、男性では20代、特に2019年以降20代前半が多かった（図2）。15歳から54歳までの全ての年齢階級で2002年以降減少か横ばいとなっていたが、2018年から20代で増加し、2021年には全ての年齢階級で増加に転じた。2022年には20歳から54歳の年齢階級で前年より減少した一方、10代後半では2022年、2023年と増加が認められた。

図2 男性の年齢階級別淋菌感染症定点当たり報告数、15～54歳、2000～2023年



女性の年齢階級別定点当たり報告数は、2000年以降一貫して20代前半が最も多かった（図3）。2002年以降2016年までは、15歳から54歳の全ての年齢階級で横ばいから減少していたが、2017年以降20代前半で再び増加した。さらに2021年からは10代後半でも増加がみられ、2023年には20代前半に次ぐ高い値となった。

図3 女性の年齢階級別淋菌感染症定点当たり報告数、15～54歳、2000～2023年



2023年の定点当たり報告数は、女性は前年と比べて増加し、2010年以降で最も高い値となった。また、男女ともに10代後半で増加がみられ、特に女性では2023年が顕著であった。

若年層での増加を踏まえ、2025年11月10日に一部改正された「性感染症に関する特定感染症予防指針」では、若年層を対象とした性教育の強化や学校との連携が重点的に位置づけられた<sup>1</sup>。これを受け、学校等と連携した性教育の推進に加え、医療機関に対する淋菌感染症報告数増加の周知や、医療機関・保健所における診断された患者に対する安全な性行動の啓発、パートナー診断・治療の推進がより重要となる<sup>2</sup>。

参考

1. 厚生労働省健康・生活衛生局感染症対策部感染症対策課「性感染症に関する特定感染症予防指針」（令和7年11月10日）
2. 日本性感染症学会、「性感染症診断・治療ガイドライン2026」